

国を越えてつながる里づくり-アフリカの方々との交流から-

山形県内陸北部にある山村、角川の里も最近めっきり寒くなってきた。本稿を書いている早朝、明るくなってみると角川の代表的な山である高倉山が初冠雪を迎えた。高倉山に3回雪が降ると里にも雪が降ってくると言われている。積雪3メートルにもなる角川の里ではこの時期、村人達は雪が降る前の冬籠りの準備で大忙しである。

こんな寒い折、アフリカの国から23名の教員が2泊3日の日程で研修に角川の里を訪れた。ベナン、ブルキナファソ、コートジボアール、ルワンダといったまさに赤道直下の国々の人々だ。昨日、初日のプログラムが終わったところだが、里の人々との交流が深まる光景を目の当たりにすることができた。

海外からの研修生の受け入れにおいても、角川の里の受け入れスタイルは変わらない。住民が協働して手作りで受け入れる。歓迎会では、地元のおばちゃんたちの郷土料理が出され、アトラクションとして若手メンバーで構成する和太鼓グループが熱演をし、好評を博していた。宿泊は農家ホームステイ、住民が「里親」として親戚の延長線上で受け入れようというわけだ。翌日からはいよいよ里地里山での体験活動が始まる。指導にあたる地元のおじさんは現場や道具の準備を整えている。

受け入れにあたっての里の人々のさまざまな心配りも微笑ましい。郷土料理については、アフリカ人の宗教上の理由等から食べることができない食材を念入りに調査し何度も料理担当メンバーが協議を重ねていたし、和太鼓グループも、アフリカ人が太鼓等に深いつながりがあることから、一緒に演奏に参加できるプログラムを準備していた。

山奥の村が、海外のまったく違った文化圏の人々に必要な配慮をして里の諸活動に協働参加して受け入れられるようになったのも、これまでの地域作りにおける交流と学習の経緯があった。ドイツ人留学生を1年間の長期にわたって里山づくり活動に受け入れたことやアメリカ人のホームステイ受け入れ、そして子どもたちとの学習活動を毎年のように行ってきたことが経験として蓄積している。何より角川の里では、海外から来た花嫁が数多くおり、地域行事を共に行ったり、中国餃子に代表されるような地域の新たな産品開発の契機にしたりするなどの、交流と学習の長い努力の歴史があった。それは必ずしも常に順調であったわけではない。うまくいったりいかなかったり、お互いに誤解したり、そうした試行錯誤を繰り返しながら、今も悩みながら行っているものである。

しかし、そうした交流と学習の努力が、山里の地域作りを常にフレッシュなものにしていく。違った環境や文化的背景を持つ人々との交流は、里づくりの基盤となる理念や住民の考え方を見つめなおすきっかけとなる。それは里で活動をしている人々にとって、普段気がつかない自分たちの日常的な営みの価値や意義を見つめ直すことであり、すなわちふるさとを「再発見」する契機でもある。ここから新たな里づくりが生まれる。

まあ、難しいことを言わなくとも地元の子どもたちは、こうした外部者との交流に興味津々、びくびくしながらも目を輝かせながら楽しんでいるようだ。その中でふるさとの誇

りを自然に得ていくのだろう。

角川の里を訪れる人々もまた何かしら価値あるものを心に得て帰っていくようだ。今回遠い国から訪れたアフリカの教員研修生も角川の里から何か得て、自分たちの国づくりにつなげてもらえればと思う。国を越えた交流と学習、里づくりの輪が広がっていくことを願ってやまない。